

W・Gまとめ資料の見方

【はじめに】

★ワーキンググループ（W・G）とは。※以下は「W・G」と記載

日野市放課後児童クラブ（以下「学童クラブ」という。）条例の策定に向け、日野市、学童クラブ保護者、関係機関等との意見交換や基準検討を実施するとともに、必要な情報等を日野市子ども・子育て支援会議（以下「支援会議」という。）に提供し、連携するため、設置したグループ。

★W・Gメンバー構成

平成26年3月現在

番号	区分	団体等	役職等	氏名	備考	
1	学童クラブ保護者	日野市学童保育連絡協議会	会長	對馬 智子		
2	ひのっちコーディネーター	日野市放課後子どもプラン事業 「ひのっち」コーディネーター	代表	佐野 礼子		
3	関係行政機関の職員	日野市子ども部	子育て課長	中田 秀幸	リーダー	
4			子育て課長補佐	谷 光彦	サブリーダー	
5			副主幹	谷 剛毅		
6			主任	志茂 哲哉		
7			主任	木暮 博		
8			主任	岡本 大		
9			主事	西野 剛史		
10			日野市立児童館	館長	熊谷 真知子	
11				館長	佐々木 哲	

★W・G開催

第1回：平成26年3月4日（火）午後7時～9時 出席者：11名

※主なテーマ「学童クラブの役割と現状」「学童クラブ・ひのっち・児童館の関係性」
「日野市の特徴、その他」

第2回：平成26年3月27日（木）午後7時～9時 出席者：10名

※主なテーマ「学童クラブの現状と入所基準について」

「学童クラブを必要としている対象について」「障害のある子について」

第3回：平成26年4月16日（水）午後7時～9時 出席者：12名

※オブザーバーとして、「スキッパー代表 宮崎 様」参加

※主なテーマ「発達障害のある子について」「本当に必要な子はどのような子か」

第4回：平成26年5月1日（木）午後7時～9時 出席者：12名

※オブザーバーとして、「子ども家庭支援センター 宮澤センター長」参加

※主なテーマ「振り返りと今後に向けて」

★資料の種別

①W・Gまとめ資料 → 「資料2-①」

②学童クラブ基準策定ワーキング・グループ会議 実施回別要点 → 「資料2-②」

★「学童クラブ」「ひのっち」「児童館」の役割

学童クラブ：保護者が労働等により昼間家庭にいない者に対し、放課後等に適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図る。

ひのっち：市内全ての児童を対象に学校施設を利用し、放課後等の安全・安心な居場所づくりを地域の方々の参画を得て、遊び、勉強、スポーツ・文化活動、住民との交流活動を行う取組を実施することにより、子どもたちが地域社会の中で、心豊かで健やかに育まれる環境づくりを推進する。

児童館：地域における子どもの余暇活動の拠点として、不特定多数の地域の子ども達に健全な遊びを提供し、健全育成活動を行う場。大人（職員やボランティアリーダー）の目があり、子ども達が放課後等に安心して居られる屋根つきの公園。
また、子育て中の保護者の育児不安解消の手助けなど子育て・子育て支援や、子どもを通して地域の結びつきを強めるなど、地域活動の拠点としての役割も果たしている。

【その1】

W・Gでは、条例の策定に向けた検討からスタートしたのですが、意見交換をする中で「学童クラブが本当に必要な子はどのような子か」また「そのために検討しなければならない事項は何か」という視点になり、様々な角度から検討を重ねてきました。

これまで、日野市は子どもたちの放課後支援について他市よりも進んで整備してきました。今後、子ども・子育て支援会議において意見を伺う上で参考となる情報提供として、「資料2-①」・「資料2-②」を作成したものです。

【その2】

資料2-①：①W・Gで話してきた内容や考え方をキーワードとして集約している資料です。

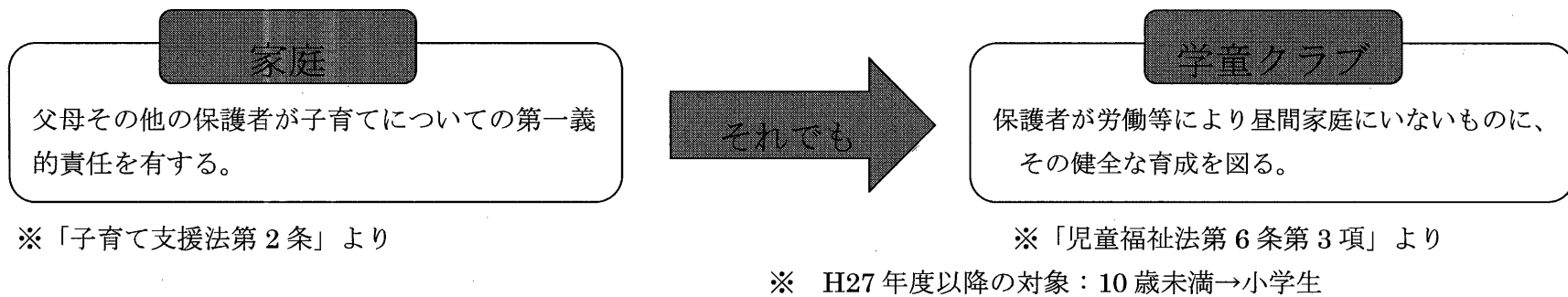
上から「大枠」「中枠」「小枠」「細枠」として記載

- ②「大枠」は家庭と学童クラブの役割について
- ③「中枠」は家庭と放課後の姿（イメージ）と学童クラブの実績と要望の表
- ④「小枠」は学童クラブが本当に必要な子について
- ⑤「細枠」は行政と家庭が検討していかなければならない課題など

資料2-②：①第1回W・Gから第4回までのテーマと主な意見になります。

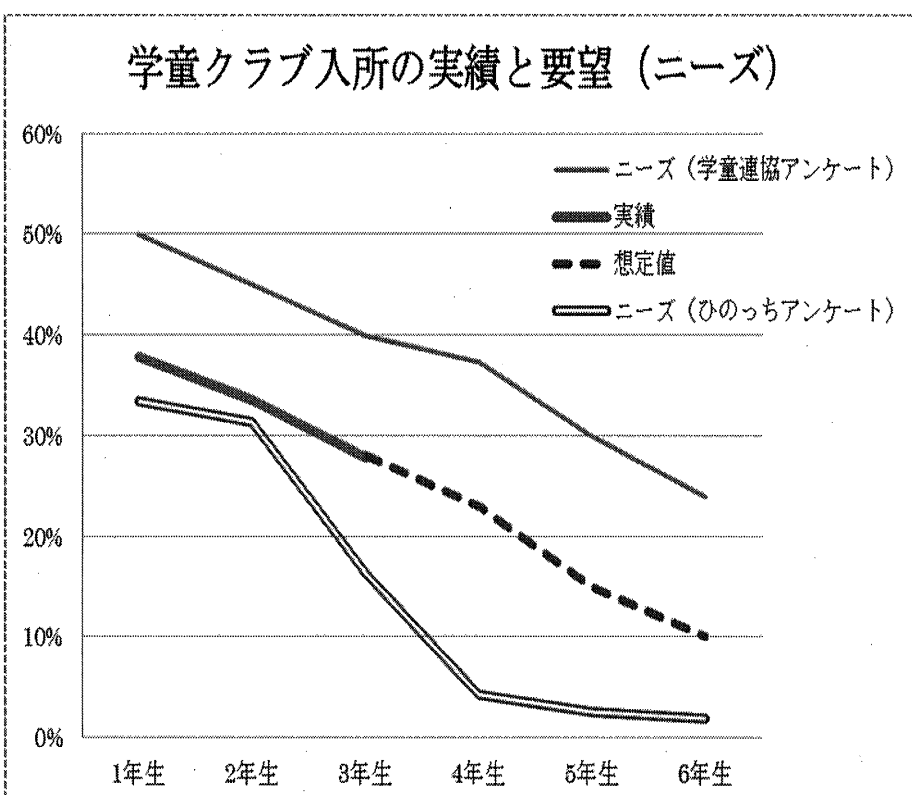
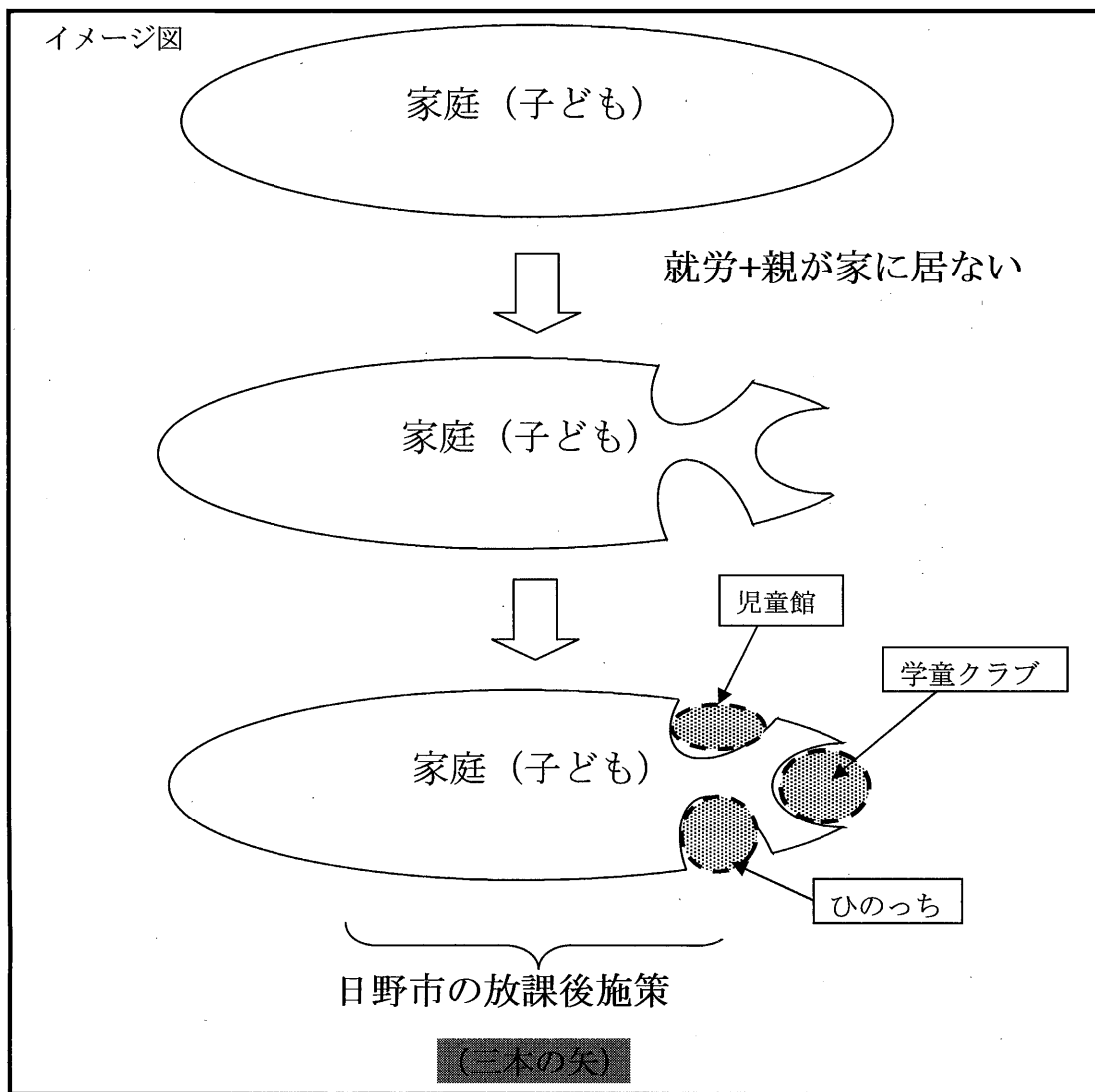
～W・Gまとめ資料～

○大枠



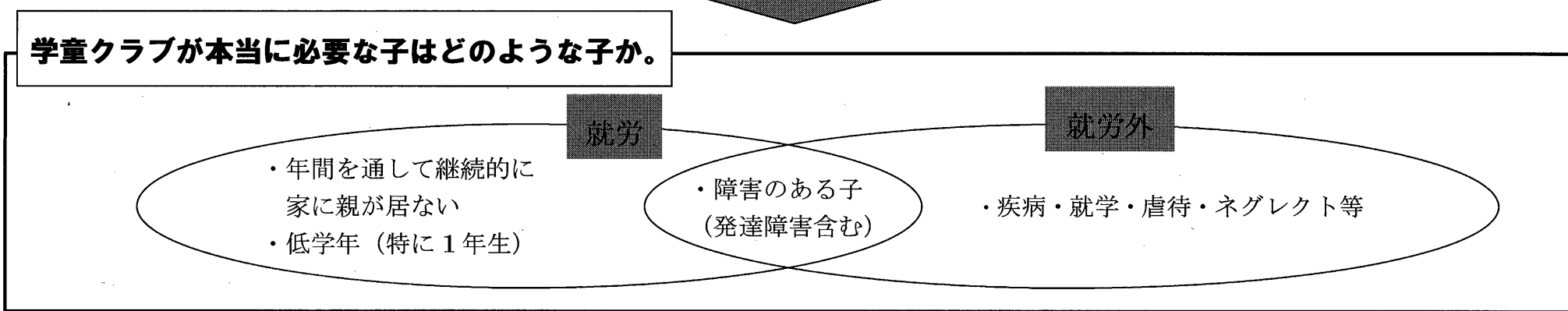
○中枠

<参考>
実績：H26年度 4/1 現在の入所者数

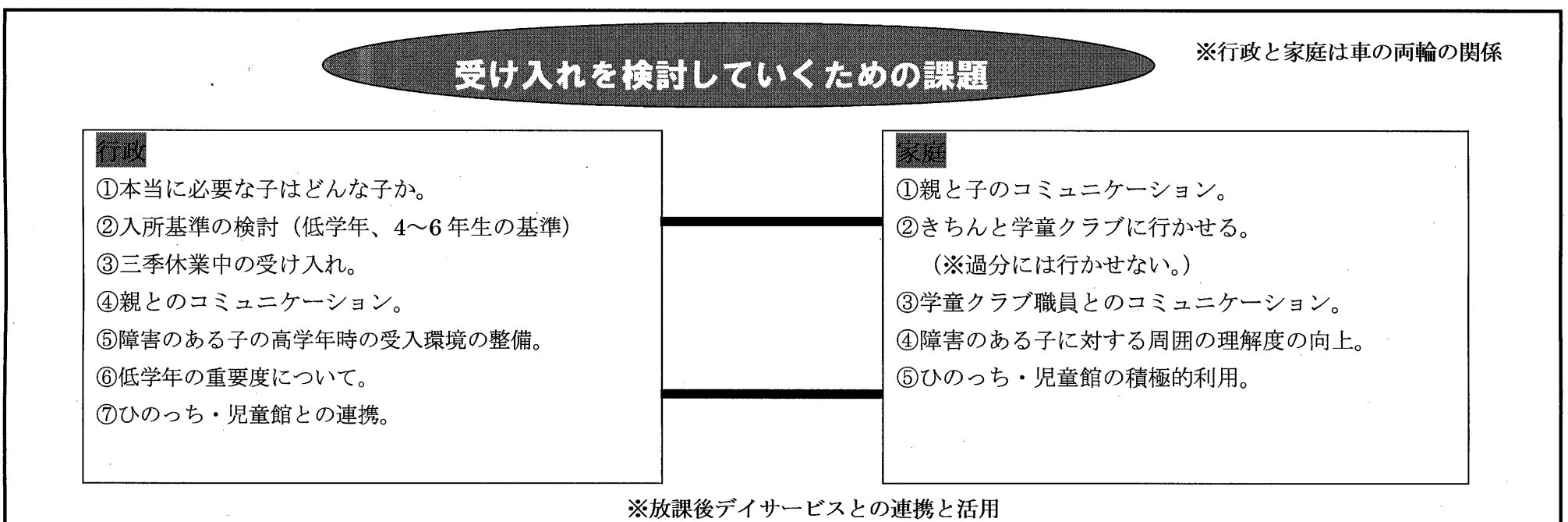


高学年になれば子どもの居場所の選択肢は増えていく。
Ex) ひのっち、児童館、公園、習い事等

○小枠



○細枠



学童クラブ基準策定ワーキング・グループ会議 実施回別要点

○ 第1回（平成26年3月4日（火）午後7時～9時）出席者：11名

(1) テーマ：学童クラブの役割と現状

- 意見：家庭環境や子どもの成長過程において、必要としている児童に学年は関係ない。
- ：障害や発達障害の子にとって、「学童クラブ」は必要。
 - ：フルタイムで働いている家庭を最優先で見てあげる必要がある。
 - ：三季休業中のみ学童クラブを利用する親がいる。
 - ：親にとって安心して働けるために「学童クラブ」が必要。
 - ：学童クラブの職員は、保護者と家庭で子どもがどんな様子か話しながら育成しているため、仮に、週2日の就労形態の人など、継続的に行事の参加等ができない状況にある子どもは、育成上の工夫を要する。
 - ：親が子どもに対して不安を抱く場合のほとんどは、「学童クラブ」を望んでいる。
 - ：「ひのっち」の見守りと違う要素として、「学童クラブ」は継続的に児童を育成していくという考えがある。
 - ：子どもの視点として、親に言われ、仕方なく利用している子もいる。
 - 子どもの気持ちとして、本当は自由に遊びたいと思っている。
 - 「学童クラブ」を嫌がり（おやつが嫌、自由でないなど）、入所後に「ひのっち」を利用している子は多くいる。
 - ：高学年まで入所の場合、高学年（特に5、6年生）から入る子の中には、学童クラブになじめずにどのように過ごして良いかわからない子がいるのではないかと。
 - ：現行の基準（週2日の就労等）で入所後、親が頻繁に家にいるにも関わらず、利用しているケースが見られる。

(2) テーマ：「学童クラブ」・「ひのっち」・「児童館」の関係性

- 意見：自由に子どもを遊ばせるならば「学童クラブ」よりも「ひのっち」のほうがよい。
- ：「学童クラブ」と「ひのっち」では、特に三季休業中や時間に大きな違いがある。
 - ：「児童館」を利用している常連の子どもは、「学童クラブ」を卒所した子（4年生以降）が多い。
 - ：「学童クラブ」の申し込み時に児童館を紹介すると、親が知らないことも多くある。

(3) テーマ：日野市の特徴、その他

- 意見：日野市の良い特徴として、子どもたちが放課後過ごすことができる場所「学童クラブ」・「ひのっち」・「児童館」と多くの選択肢がある。
- ：子どもは発達段階に応じて居場所が増え、また自分たちで居場所（遊び場）を見つけている。
 - ：近年、いわゆる気になる子（発達障害の子）が多く出現している現状がある。また、子どもたちの遊び方や放課後の過ごし方なども多様化している。
 - ：障害児の受け皿も必要。

○ 第2回（平成26年3月27日（木）午後7時～9時）出席者：10名

(1) テーマ：「学童クラブ」の現状と入所基準について

- 意見：現在の「学童クラブ」の実態としては、地域性には若干の差があるものの、全体的に欠席率が高い。
- 学童クラブ以外の過ごし方が多数存在する。保険的役割で学童クラブに入所している子もいる。
 - ：児童1人あたり1.65㎡の数字が減ると、怪我や喧嘩も起こる可能性が高くなるかも知れないため、

慎重に考えてほしい。

- : 緊急的な受け入れを考えると、定員+10%程度の余剰は必要ではないか。(実際の出席率が常に100%ではないため、実質的には児童1人あたり1.65㎡は確保されることになるのではないか。)
- : 現状の受入状況を見ると3年生の後半は「学童クラブ」が必要なくなっていくのではないか。しかし、4~6年生でもさらに必要であるならば、要件を細かく決めて受け入れるべきではないか。
- : 「学童クラブ」では、本来の目的の1つとして就労等の理由により家に親がいない子どもに対して生活の場を与えることのはずだが、一般的な家庭の親が子どもを育成する時以上の育成(サービス)を提供しているのではないか。
- : 「学童クラブ」で行う育成(サービス)が手厚いほど、家にいるよりも育成してくれると親は思ってしまう傾向がある。
- : 「学童クラブ」に対して、保護者が本来の目的と違った考えを持ってしまうと、家庭が持つ役割としての子育てについて第一義的責任が薄れてしまうのではないか。その結果として、親が子どもと接する機会が薄れることになった場合、親育ちという点からもよくないのではないか。
- : 国が示した基準(特に参酌基準)以上のサービスをした場合、人件費等様々な経費が必要となるため、それに見合った金額の設定(育成料)をしたほうがよいのではないか。

(2) テーマ: 「学童クラブ」を必要としている対象について

意見: 両親ともにフルタイム、ネグレクト、DVなど

: 祖父母がいるかないか(在宅か働いているか)。(保育園では要件としている)

: 親の就労等の理由によることなく、受入を検討しなくてはいけない子どももいるのではないか。

(3) テーマ: 障害児について

意見: 現状の条件(入所基準等)でおおむね良いのではないか。

: 集団になじめない子も受け入れを検討すべき。しかし、高学年になるほど、周囲の子や職員に怪我等をさせてしまう恐れもある。(体格差があるため)

: 特別支援学級(固定級・通級)からも「ひのっち」に参加している子はいるが、きめ細やかな育成という面では、「学童クラブ」のほうがいいのではないか。

: 「学童クラブ」や「ひのっち」には、いわゆる気になる子(発達障害など)は数多くいるが、特別支援学級(固定・通級)等に属していない子どもは判別が難しい。

○ 第3回(平成26年4月16日(水)午後7時~9時)出席者: 12名

※オブザーバーとして、「スキッパー代表 宮崎氏」参加

(1) テーマ: 障害児・発達障害児について

意見: 障害児にとっては、4年生まで通える状況であったとしても、「なぜ4年生まで」と周りの子から見られることを嫌がって、通えなくなってしまう。

: 発達障害の親子(特に親)にとって、周りから発達に関して言われたり、レッテルをはられることが一番つらい。

: 発達障害児にとって「ひのっち」や「児童館」は、見慣れない人や馴染みのない場所等の理由により、結果として行きづらい現状にある。

: 「学童クラブ」が利用できなくなった後(5,6年生)の居場所が家しかないため、特に長期休みの不安が大きい。

: 5,6年生まで「学童クラブ」に入れたとしても、障害児のみだけだと、結果として周りにどう見られているか気にすることになるため、行けなくなることが考えられる。また、全員行けるのであれば、障害児も行きたいと思う。

: 親は行かせたいと思っているが、子どもにとって落ち着けない環境であったり、コミュニケーション

ョンが取れないと行きたくなくなる。

：親は行かせたいと思っけていても、「学童クラブ」には決まったルールがあることと発達障害等の個性（特性）のある子どもにとっては、すぐに馴染めないため、結果として行かないのではないか。
：発達障害に対しては、社会としての認知度・理解度を上げて、親が孤立感を持たないようにすることが必要となってくる。

(2) テーマ：本当に必要な子はどのような子か

意見：保育園の週3日4時間（48時間）の就労基準と比較して、「学童クラブ」の週2日14時以降の就労基準はとても緩やかだと感じる。親は子どもが何をしているか把握していれば、「学童クラブ」に預けなくてもよいのではないか。

：就労等の日数は少なくても、放課後に親が家にいない子どもにとって「学童クラブ」が必要な場合もあるのではないか。

：親が家にいる時間帯に学童クラブに行くというのは、違和感を感じる。

：「ひのっち」では、最近4年生で遊びに来る子どもが多い。中には「学童クラブ」が終わってよかったという子もいれば、「学童クラブ」が終わったことで泣く子もいる。

：例えば、育成料が上がったとしたら、「学童クラブ」を必要としない人もいるのではないか。

：就労形態としての週2日勤務などはパートである場合が多く、週ごとに違うシフトである可能性も高いので仕事の時だけ学童クラブに行くなど、入所の段階での調整は難しい。

：財政状況が厳しい中、単に施設を建てるだけでなく、保護者負担分以外に公費（税金）を使っていることを踏まえ、入所基準や運営基準もしっかりと見直していく必要があるのではないか。

：実際の子どもたちの入所状況や様々な状況を踏まえると、学年が低いほど必要性は高いと考えられる。

(3) その他

意見：学校敷地内にある「学童クラブ」では、朝学校の門が開いていれば、子どもが中に入れて安心。学校敷地外の学童クラブに関しても同様に考えていく必要がある。

：現状、学校休業日等の開所時間に関して、親が会社に遅刻の申請をして「学童クラブ」に届けている。

○ 第4回（平成26年5月1日（木）午後7時～9時）出席者：12名

※オブザーバーとして、「子ども家庭支援センター 宮澤センター長」参加

(1) テーマ：振り返りと今後に向けて

意見：日野市における子どもたちの放課後等の過ごし方は、「学童クラブ」に特化して考えていくのではなく、日野市の良い特徴である「学童クラブ」「ひのっち」「児童館」を今まで以上に活用・連携をしていくことが良いのではないか。日野市の子どもたちの放課後等は市全体で支えていく。

：市の示したニーズ調査に基づく「量の見込み」の数値は理解できた。ただし、「学童クラブ」の性質や現状を鑑みると、地域ごとに差が生じている状況にあるため、全体ニーズを基本として地域対応も考えていかなければならないのではないか。

：日野市では、「ひのっち」「児童館」も放課後のあり方として計画に盛り込んで話し合っていく必要がある。

：「学童クラブ」「ひのっち」「児童館」は連携し合っているが、それぞれ特性があって互いに補完しあっている状況だが、本質は違うということ踏まえながら、きちんと考えていくべきではないか。